変態警察２４時

シャルロッ党員N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変態警察２４時

【Ｎコード】
Ｎ１６４１Ｙ

【作者名】
シャルロッ党員Ｎ

【あらすじ】
人類警察（ピープルポリス）独立機動部隊。
そこにはハイスペックな変態たちが集まる。
主人公　飛高（ひだか）　軍（いくさ）とロリコンにして厨二病の残念美少女　明科（あかしな）　鈴（りん）音（ねね）の変態の変態による変態のための物語が今始まる。

第一話　Ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ

「えー、そうですねアイツは一言で言えば、残念美少女、ですね。」

彼女の印象を人に訊くと大概の人はそう評した。

厨二病に冒され、ロリの鎖に絡めとられた哀れな変態。

で、ありながら『鬼装天鎧（セント・シュラウド）』なんていう特異能力を有する能力者でもある。

そんなデタラメなハイスペック馬鹿。それがアイツだ。

で、だ。

その当人が今目の前に居るんだが・・・

「貧乳に非ずんばロリに非ず！」

・・・こんな時、俺はどうしたら良いんでせう・・・

僕は飛高（ひだか）　軍（いくさ）。

人類警察の特務課所属の平々凡々を絵に描いた様な凡人だ。

「なあ、飛高よ。我が心はロリと巨乳は共存し得ない、と言っているんだがキミはどう思うね。」

「知るか。」

この変態は明科（あかしな）　鈴音（りんね）。

誠に遺憾ながらこの変態は僕のパートナーらしいのだ。

しっとりと濡れたような艶やかな肩までかかる黒髪。

積もったばかりの雪を想起させる白い肌。

スレンダーでありながら出るところはしっかりと出た体つき。

「わかった、飛高。譲歩しよう。黒髪ロングと茶髪ショート、どちらがロリ萌の真理に近いと思う？」
「知るか、少し静かにしてなさい。」
「フッ、それは無理な相談だな。この私、明科　鈴音の口を塞ぐことなど出来るものか！」
「はぁ・・・・・」

明科は掌を額にあて不敵に笑っている。
こういった事さえなければ普通に可愛いんだが・・・

正直どう対応していいかわかりません。
誰か教えて下さい・・・

本当、助けて、下さい・・・

「フフ、この世はまた我を拒絶するか・・・この深きロリの業、最早誰にも止められはせんよ。フフフフフ・・・」

ああ、主よマジで助けて下さい。

「アァーーハッハッハッハッハッ！！さあ、奏でよう！哀しき懺悔のレクイエムを！！」

本当に、どうしてこうなった・・・

話は昨日、西暦の２４６７年の四月九日に遡ります。
その日僕は急に支部長補佐の鎌谷（かまたに）　蒼天（そうてん）さんに呼び出され、明科と双武（デュオ）を組むよう命じられました。
あ、因みに双武（デュオ）というのは仕事上のコンビの事。

なにやら各支部から幾人かずつの人員を集めて特務課独立機動部隊というものを創設するらしく日本国関東支部からは実動要員として僕と明科が選ばれたのだそうです。

で、今ここは人類警察専用の武装ヘリ、ブルーソードｍｋ２の機内な訳です。

「フフフ、独立機動部隊か我には似合いの戦場だな。」

さっきから隣で明科が五月蝿いです。

「どうしたね、飛高。キミはさっきから静かすぎやしないかい？」

「明科が五月蝿すぎるだけだ。」

「つれないねぇ、飛高。」

ククッ、と明科は面白そうに笑った。

知るか、つれなくて結構だ。

「あ、そうだ。飛高、我のことは鈴音、もしくはりんちゃんとよびたまえ。」

「はあ！？」

「何を驚いているんだ。大丈夫、キミのこともこれからは飛高ではなくいーくんでいくか。うん、なかなか良いな。そうは思わんか？いーくん。」

「思うか！！誰がいーくんか、誰が！」

変態な上に唐突なのかコイツは。

「我とキミは双武（デュオ）なのだから下の名前で呼ぶことに何の不思議もないじゃないか。」

「あるわ！なんで僕が明科にいーくんなぞと呼ばれる筋合いがあるんだ！！」
「坊やだからさ（キリッ」
「ガン〇ムネタはやめなさい！」
くっ、明科のペースに乗せられている。
落ち着け、落ち着くんだ、僕。
「何を驚いているんだ。大丈夫、キミのこともこれからは飛高ではなくいーくんでいくか。うん、なかなか良いな。そうは思わんか？いーくん。」
「思うか！！誰がいーくんか、誰が！」
変態な上に唐突なのかコイツは。
「我とキミは双武（デュオ）なのだから下の名前で呼ぶことに何の不思議もないじゃないか。」
「あるわ！なんで僕が明科にいーくんなぞと呼ばれる筋合いがあるんだ！！」
絶叫してしまった。本気のツッコミをいれてしまった。
「明科　鈴音様、飛高　軍様もう少々で独立機動部隊の拠点、ジークフリード級飛空戦艦ビスマルクに到着します。座席に戻ってお待ち下さい。」
無機質な機械音声が僕たちに告げた。
「遂に到着だ。なあ、いーくん。」
「いーくんはやめろ。」

僕たちは座席に戻りシートベルトをしめながら喋り続ける。
そうしているとまた機械音声が僕たちに声をかける。
「ビスマルクが肉眼で確認可能な距離に達しました。モニターに画像を出力しますか？」
「ああ、頼もうか。」
そう答えたのは明科。
そうすると中央モニターにビスマルクの姿が映し出される。
「うお・・・・・凄い・・・・・・」
「これは、我も驚きを禁じえんな・・・・・」
二人してビスマルクの姿に圧倒される。
紅に彩られたその姿は西洋の伝説にあるウェルシュドラゴンを思わせ、風格と威厳を兼ね備えている。
外装各部に装備されたエナジーカノン”ケラウノスｍｋ２７”が黒光りし、自らが戦艦である事を強く主張している。
また艦首部分には加速縮退粒子バリアフィールド展開システム”ネオアイギス”。
「着艦します。震動にご注意下さい。」
フィィィィン・・・・・・
独特の排気音を発しながらブルーソードが右側面ハッチからビスマルクに着艦した。

「ビスマルクに着艦いたしました。長旅お疲れ様でした。」
機械音声がそう告げるがいなや明科が立ち上がり僕に向き直った。
「さあ行くぞ！いーくん！早く用意をしないか！！」
「なんでそんなハイなんだ、少し落ち着け。明科。」
「鈴音と呼べと言ったろう、いーくん。それに落ち着いていられるわけがなかろう！ビスマルクはフレキシブルヒューマノイドムーバー、通称ムーバー運用を目的として造られた艦だぞ！！」
「ああ、そういやオマエはロボオタだったっけか。」
「ロボじゃない！フレキシブルヒューマノイドムーバーだ！いいかそもそもムーバーというものは」
なにやらムーバーについて語り始めてしまった明科。
なにやらエネルギー力場制御がどうとかよく解らんことを喋り始めたが興味があるわけではないので聞き流す。
「よし、降りるか。」
「ちょっと待てい。いーくん今のは酷いんじゃないかね。」
「酷くない。早く来ないと置いてくぞ。」
僕は荷物を肩からかけ、ヘリを降りた。
明科は慌てて僕を追ってきた。
その瞬間、大量のムーバーに埋め尽くされたハンガー（格納庫）が目にはいってきた。
そこはある種の異空間だった。
整備オイルらしき臭いが充満し、人の熱気が空気に厚みを与えている。

「凄い、な。我もそれなりのマニアだと自負しているがここまで大量のムーバーを一度に見たのは始めてだ・・・」

呆けたように明科が声を漏らす。

「しかもどれもが各国の最新鋭機だ。」

「アメリカのγブラストルｖｅｒ２．０、フランスのフルールハイマニューバー、ドイツのアイゼンレーヴェｍｋ３。」

「そして極めつけは」

「日本の不知火蜻蛉（しらぬいとんぼ）に暁蟋蟀（あかつきこおろぎ）、だろう？」

「「！！」」

急に声をかけられた。その声は歴戦の兵士特有の重みを持っていた。威圧感とも威厳とも捉えられるような類いの重みをだ。

その声の主は驚く僕たちを興味津々と言ったような眼で見つめながら続けた。

「始めまして、日本国関東支部代表。私の名はエドウィン・ダークナイト。アメリカミネソタ支部代表だ。」

そして次の瞬間この男を信じられない言葉を口にした。

「所有性癖は黒髪巫女フェチだ！」

・・・世界・・・オワタ・・・

第二話　独逸の獅子

株式会社　人類警察（ピープルポリス）。
２０３５年に組織された民間警備会社。
契約した地域全域を警備する事を売りにしており、”一国から一社まで”の売り文句はあまりにも有名。
現在１１２の国家が契約している世界規模の大会社。

そしてここはその人類警察の保有する戦艦ビスマルクのハンガー（格納庫）だ。
そのはずなのだが・・・

「所有性癖は黒髪巫女フェチだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「どうしたね、飛高。世界オワタ的な顔して。」
「いやあ、驚かせるつもりはなかったんだが・・・」
「いや、我は特に気にしてないぞ。ヨロシク、ダークナイト氏。我の名は明科　鈴音。所有性癖はロリコンだ。」

明科とダークナイトさんががっちりと握手を交わし、ニヤリと笑いあう。

「なに仲良くやってんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「あ、復活した。いーくん、自己紹介したまえ。」
「したまえ、じゃねえ！いやするけども！！」
「ハッハッハッハ、面白いな。お二人さん。」

「そりゃどうも・・・始めまして、飛高　軍です。」
「飛高くんはどんな性癖をお持ちで？」
「ああ、なにやらいーくんは特殊性癖には目覚めていないらしい。残念ながらな。」
「なにが残念ながら、だ。どこも残念じゃないわ。逆に明科が残念だ。」
「そんなに誉めるな。」
「誉めてない誉めてない。」
「ハッハッハ、にしても珍しいな。真人間だなんて。」
ダークナイトさんが口髭をいじりながら興味深そうに答えた。
「珍しい？」
「ああ、ここに来るような奴ってのは大概変態や良い意味での馬鹿が多いからな。」
苦笑するように笑い、ダークナイトさんはそう言う。
「ま、何はともあれ宜しく頼むぞ。飛高くん、明科くん。私のことはエドと呼んでくれ。」
「了解した、エド氏。」
「よろしくお願いします、エドさん。」
エドさんと軽く握手をする。硬くゴツゴツとしていた。

◇◆◇◆

「ああ、そうだ私は艦長から君たちの案内を任されているんだが。どこか見てみたい所があるなら案内するが、先に個室に案内した方

がいいかい？」

廊下を歩きながらそう言われたので、先に個室に案内してもらう事にした。

「ええ、頼みますエドさん。明科もそれでいいな。」

僕は振り返り明科に声をかけ、ってあれ？明科がいないんだが・・・どこいった？

「明科？あれ、アイツどこいった？」

そんなことを言っていたら、向こうから走ってくる人影が。

「ハァッハァッ、置いてきぼりだとは、ハッ、つれないねぇ、いーくん？」

「知るか、ついてきてると思ったんだ。それといーくんって呼ぶな。」

なんかウザかったのですげなくあしらった。

というよりロボットに夢中で置いてかれるって小学生か。コイツは。

「まあまあ、喧嘩しなさんな。さ、君たちの個室だ。」

「へぇ、これが・・・」

「ほう、結構広いのだな。」

明科と僕は部屋に入り感嘆のような感情を含んだ声をもらした。

個室は４．５畳ほどの広さで清潔感のある白い壁を有するものだった。

「凄いですねエドさん。乗員全てにこんな広い部屋が与えられるんですか？」
「いや、君たちがパイロット扱いだからさ。まあこの艦は火器管制なんかを量子コンピューターに制御させていて乗員の絶対数が少ないから普通より乗員の個室は広めだろうな。」
「ああ、なるほど」

ひとしきり部屋を整理して荷物を置き、僕と明科は部屋を出た。
その後はエドさんに艦の案内をしてもらった。
艦長に着任報告をしに行ったが忙しいらしく明日で良いと言われてしまった。
そして今ここはビスマルク居住区中央に位置する乗員食堂”Ｓｉｌｖｅｒ Ｓｐｏｏｎ”。

「いやしかし、ムグムグ、この艦は凄いな。ムグムグ、特に見たか？いーくん。ムグ、あの量子コンピューター！」
「物を食べながら喋るな。あといーくんって呼ぶな。」

僕の隣で明科が七倍カツカレーを掻きこみながら話かけてくるので軽くあしらう。

「まあ、量子コンピューターに興奮するのはわかる。しかもビスマルクのは新型の”ヴァイスバイゼ”だしな。」
「ヴァイスバイゼ？」
「ああ。ドイツ技術者の叡知の結晶、アルメティヒシステムを搭載した超高度演算処理能力を持つ新型だ。」

「その通りデス。我らドイツ人の優秀さを世界に知らしめた素晴らしき発明なのデスヨー。」

後ろから声をかけられた。エドさんの時にもそんな感じだったな。
今日はそういう日なのか？
というか今の声、妙に幼い感じだったな。
振り向き、声の正体を確認して僕は驚愕した。
そこに居たのはどうみても小学生にしか見えない少女だったのだ。

「ロリっ娘キターーーーー（゜∀゜）！！！！！！！！」
「ぎゃあああああ。な、なにするデスカー！」
明科がロリっ娘に抱きついて頬擦りを強行している！！
しまった！！明科がロリコンなの忘れてた！
「キミＣａｗａｉｉ！我の嫁ぇぇぇぇぇ！！」
「誰があんたの嫁デスカ！！」

そして声の主、その少女は確かに明科が言うように可愛らしい顔立ちをしていた。
頭髪は美しいショートの金髪で見る者に健康的なイメージを与え、元々の少女の愛らしさを底上げしている。
「嫁においで！いやもうする！決めた！！キミは我の嫁！」
「勝手に決めるなデス！！」
ゲシッゲシッゲシッ
少女は三発ほど明科に蹴りをいれ拘束から逃れた。
もう、半ば涙目になっている。
明科はロリっ娘に蹴ってもらえて悶えている。コイツ真面目にキモ

い・・・
少女が涙目になるのも解る気がする。
まあ、急に変態に迫られれば当たり前な気もする。
「うう・・・ワタシに百合属性は無いのデス！ワタシはクーデレ風紀委員フェチなのデス！！」
ん？あれ？なんか耳おかしくなった？とっても不思議な言葉が聞こえたぞ？
「クールがデレる事で氷と炎が調和して、美しさを作り出すのデス！！そこへ風紀委員属性！たまらんデス！！」
また変態だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
今度はマイノリティな変態か！！
「フッ、我は百合属性ではない！我は、ロリコンだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
明科、お前もやめろォォォォ！！
張り合うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
「黙りなさいデス、ロリコン！このワタシ、アウラ・アインホルンと勝負しなサイ！」
「勝負？我がか？」
「そうデス！一週間やるデス！その間にムーバーに慣れておけデス！！」
「ムーバーでこの我、オンラインムーバーシュミレーターで百戦錬磨の明科　鈴音に勝負を挑もうというのか！」
「その通りデス！実戦とシュミレーターの違いを教えてやるデス！ワタシが勝ったら二度とワタシに近づくなデス！」

「フフン、良かろう！だが、アウラたんが敗れた暁には！君に一週間ピンクのワンピースとランドセルを装備してもらう！！」
「その条件、のんでやるデス！！」
もう嫌だ・・・・・・・・あ、この盛り蕎麦のワサビ旨い。

◇◆◇◆

ー明科　鈴音の個室ー

「はあ！？ムーバーに一度も乗ったことがない！？」

明科と僕は明科の部屋であの少女、アウラ・アインホルンとの勝負に勝つため、策を練っていた。
練っていたのだが・・・

「ああ、我は基本的にはただのマニアだからな。乗ったことは一度も無い。」
「胸を張って言うことか！！じゃあなんで勝負をうけた！」

明科がムーバーに一度も乗ったことが無いなどとふざけた事をぬかすので話が全く進まない。

「何故、だと？」
「ぼ「坊やだからさ以外でな。」ぅ・・・いーくんのいけず・・・」

拗ねた明科は可愛かった。いつも普通にしてれば僕はコイツに惚れてたかもな、と感じる程に。

「・・・まあ、いいや。よし、明科。先ずは知識から確認していこうか。」

「了解した、いーくん。えー、まず・・・」

ムーバーとは直訳すれば動くもの、だな。
フレキシブルな機動が可能な人型兵器。故にフレキシブルヒューマノイドムーバー、な訳だ。
その始まりは２４１７年に日本人技師　王居町（おおいまち）　芥工（あくた）学博士によって作られた宇宙空間作業用パワーローダーの発明だ。
王居町博士は火星でのみ生成される特殊金属、ディオシウムと金属粒子、エーテリオンを用い、パワーローダーの大量生産を可能とした。
また、パワーローダーの大量生産は火星経済に大きな利益をもたらした訳だな。
そしてそれがあったが故に今の火星の発展がある訳だ。
ん？何だ、いーくん。パワーローダーの話は良いから早くムーバーの話をしろ？
フフン、関係無い話をこの我、明科　鈴音がすると思うか？

え、思う？え～・・・まあ、良いか。

で、だ。パワーローダーは大量生産された事で価格が安くなり世界中で運用されるようになった。

もちろん、軍事的にもな。

パワーローダーを強化・発展させる中で発明されたのがムーバーなんだ。
それが確か２４３７年だ。

ムーバーは軍事というものを変えた。
レーダー等の電子装備の発達過剰で戦闘は有視界戦闘に逆戻りして

いたからな。
その条件下において四肢を用いたフレキシブルな駆動が可能なムーバーは圧倒的だったんだ。
空だろうと、海だろうと、陸だろうとね。

また、ムーバーは動力機関に利用したエーテリオンの影響から操縦者に特殊能力が発現する。
ちなみに我の能力、『鬼装天鎧』もエーテリオンを用いた薬の副作用だ。

で、そんなこんなで色々有って２４６７年の今現在ムーバーは第９世代型が主力となっている。
今各国で次世代型が開発中らしい。

「・・・と、まあこんなところだ。いーくん。」
「・・・成る程、まあマニアを自称するだけの知識はあるわけだ・・・で、相手の、アウラ・アインホルンって言ったっけ、のデータは有るか？」

基本的な要項確認を終え、次の因子を要求した。

「ああ有るぞ。いーくん。と、言ってもあの後に集めたデータだから少し少ないが。」
「まあ、良いさ。で？あの娘はどんなパイロットなんだ？」

「えーと、元ドイツ空軍中尉。何度かドイツ軍の公開訓練にでてるな。かなりの腕だ。」
「かなりの腕だ、ってのはどれくらいなんだ？」

率直な疑問をぶつけてみる。

「えっと、その公開訓練のレースの時に当時の世界記録を塗り替えているな。」
「世界記録をか！？」
「ああ、その時の乗機はパーソナルカラーの赤でペイントされたアイゼンレーヴェだ。」
「その時の勇姿故に、”赤き鬼百合”の二つ名がついた。」
「・・・」
・・・それって無理ゲーじゃね？
明科、ムーバーに乗ったことが無いんだろ？
「明科、もう一度聞く。ムーバーに乗ったことが無いのか？一度も？」
「ああ。シュミレーターでならSクラスだが実機に乗ったことは無い。」
シュミレーターには乗ったことがあるならまだ救いはある、か・・・
「よし、ならまずは慣れろ。実機のGにな。さっき艦長から許可も貰ってきた。ペイントライフルとターゲットビットで模擬戦だ。」
「了解した、いーくん。」
「だからいーくんはやめろと・・・」
・・・
・・・・・・・・・・・・・・
◇◆◇◆

で、一週間後。

ここはビスマルクのムーバーハンガー。
アインホルンと明科が対峙している。
明科は奇妙な自信に満ちた眼で、アインホルンは金剛力士もかくやという感じの敵意に満ちた眼で明科を睨んでいる。

「アウラたん。良い勝負にしようじゃないか。」
「フンッ。こてんぱんにしてやるデス！！」

二人は握手をして各々機体に乗り込んだ。

アインホルンは赤くペイントされたアイゼンレーヴェのカスタムタイプ。
背部に大型のフレキシブルブースターを備え機体各所にバーニアが増設された高機動型だ。
武装はサブマシンガン”Ｂｔ１７”と小型ナイフ。

明科はビスマルクにあった日本の不知火蜻蛉。
淡い青色をしており背部にはウイングブースターが装備されている。
腰部両側面にはレールカノン”鞍馬”。肩部には分子振動（バイブレート）ソードが装備された万能型。

「両者用意はいいか？」

審判を務めてもらっているエドさんが二人に呼び掛ける。

「システムオールグリーン。我はいつでも良いぞ！」
「ワタシはいつでも臨戦体勢デス！！」

「ようし、それではっ！！」

「「「バトル・スタート！」」」

二人のムーバーが発艦し、勝負が始まった。

第三話　始まりの終り（前書き）

遅くなりました。
変態警察２４時第三話です。
戦闘シーンが書けなくて苦しんだ結果、そこまで戦闘シーンの描写をいれないことで妥協してしまいました。
後々戦闘シーンが書けるようになったらアップグレードしたいと思います。

それでは変態警察２４時、楽しんでいただけたら幸いです。

第三話　始まりの終り

―ムーバーパイロットに発現する特殊能力―

・第一項　特殊能力の発現理由、またその基本原理

ムーバーに一定時間以上搭乗したパイロットは等しく特殊な能力が発現する。
その能力は人によって異なり、またこの能力はムーバーを通して発動する事が可能である。
この能力発現は動力源として利用しているエーテリオンの影響によるもので、時たまエーテリオンを利用した医療を行われて発現する者も少なからずいる。
人体はエーテリオンを体内に吸収し感知するとそれを増幅するように出来ている。
その増幅したエーテリオンを媒質にして深層意識を具現化した物が特殊能力なのだ。

・第二項　能力の強弱による区分

この能力は強さによって
いくつかの段階に区別されている。
第一段階　発現する
第二段階　自由行使が可能になる
第三段階　細かい微調整が可能になる
第四段階　二次発現と呼ばれる能力の進化がおこる
第五段階　最終発現と呼ばれる能力進化の最終段階

以上の五段階に区別されている。

現状、第五段階に至っているのは世界に一人しかいない。
現在能力は約二百種確認されている。

◇◆◇◆

特殊能力に関する基本事項二種を思い出しながら僕はビスマルクの発艦カタパルトにそびえる明科の機体―不知火蜻蛉を見つめる。

「明科　鈴音！発艦するっ！！」

ヂヂヂヂッ
カタパルトが火花を散らしながら不知火蜻蛉がビスマルクを発艦した。

「アウラ・アインホルン発進するデスっ！！」続いて明科の対戦相手、アウラ・アインホルンの機体がカタパルトから発艦していく。

この模擬戦は無害なレーザー光線を用いて行う。
レーザーが敵機体に照射され、命中すると機体の各部カメラがそれを認識し制御コンピュータに転送、実弾の場合のダメージを想定してポイントに換算する。
そして制限時間内にとったポイントを競うものだ。

今回の模擬戦は制限時間３０分。
明科のスタミナだとギリギリといったところだ。

「本当に世話がやける…」

僕は明科の回避マニューバを注視しながら呟いた。

明科はアインホルンに一方的に攻められている。
回避で手一杯、といった感じだ。
対するアインホルンは余裕綽々という風に円運動を織り交ぜたマニューバを行いながら堅実にポイントを稼いでいっている。

『デカイ口叩いた割には大したことないデスっ！！』
『くぅっ…！！』

アインホルンのライフルが火を吹き、レーザーポイントがコックピット部分に達する。
これでポイントは明科とアインホルンそれぞれ３：２５。
残り時間は１３分、なかなかにキツイ戦いだ。
Ｇが邪魔をしていなければ明科にも勝機がある…明科はオンラインシュミレーターならＳクラス、つまり世界大会レベルということだ。

だが、その上手さ故にＧという普段とは違うファクターの影響を強く受けるのだ。

だが、明科のスゴいところはそんな状況下にあっても状況にのまれないところだ。
そう、例えばこんな。『墜ちろデス、ロリコンッ！！』
『ロリコンはァ、諦めないっ！！』
『黙れデスッ、この性犯罪者ァ！！』
『ロリコンはっ、性犯罪者に非ずっ！！』
『クーデレの前にひれ伏せデスッ！』

・・・なにこの掛け合い。２ちゃんＯるかよ。
一瞬明科の味方すんのやめようかと思っちまったぜ。
そんな馬鹿な掛け合いをしながらも明科は回避を続けている。

『どうしたあ？アウラたんっ！！当たっておらんぞぉ！！』
『くっ…舐めるなデス！』

アインホルンは射撃を続ける。
だがアインホルンの弾はことごとく明科に避けられている。

明科がＧに順応してきた為だろう。
訓練段階でもＧはかかるが対人戦はコンピュータ戦とは違う。
人間の感情に左右される戦いはコンピュータには再現できない。
だが、そのコンピュータ戦も意味はあったようだ。
でなければこんなに早くＧに順応できる訳はないからな。

『ハッハァーッ！！みなぎってきたあぁ！！』
『ダマリナサイ！！』

二人は傍目から見てると仲良いように見えるんだが…

『アウラたんマジペロペロォ！！』
『変態、墜ちろデスゥゥ！！』

まあ、気のせいだな。
つーか明科何やってんだよ。真面目に勝負しろよ。
と、ここでポイント確認だ。
明科：２７
アインホルン：３０

明科はちょこちょこポイントを稼いでいたようで二人のポイント差はかなり縮まっている。
アインホルンは明科憎しで序盤にとばし過ぎたのが響いてきたのか中々ポイントを得られていない。

「さあ明科…もう少しだ。耐えろよ…」
「了解っ、いーくん！勝利の栄光を君に！！」
明科は訓練時のペースを保っていたからか俺と会話を交わす余力もあるようだ。
残り時間は3分。明科は最後の追い討ちをかける為にブースターをふかしてアインホルンにむかっていく。
と、その刹那。
ビキュゥゥゥン
一条のビームが明科とアインホルンのすぐ傍をかすめた。

◇◆◇◆

「何！？」
『なっ！？』
『なんデスっ！？』
我がアウラたんに突撃を敢行したその時、突如ビームをかすめたのだ。
赤色に輝くそのビームは我とアウラたんの右横をかすめて四散した。
「いーくん！そちらでなにか確認していないか！」
『いや、何もない。熱センサ、長距離光学カメラ、赤外線カメラ、すべて無反応だ！』
「ビーム来るデス！！」
「ちぃっ！」
ビキュゥゥゥンビキュゥゥゥンビキュゥゥゥン

ビームが我らにむかってくる。我はウイングブースターを展開して上昇と下降を繰り返しながらビームを回避する。

「アウラたん、なにか確認していないか！」

「何も反応しないデス！ビームの集束率はあまり高くないデス。長距離狙撃だと思うデス！！」

「長距離狙撃だとぉ…」

『いいや、違うよ…今のビームは私のものだ…フフフ、人類警察もなかなか平和ボケしていると見える。』

「「！！」」

突然流入してきた謎の声を聴き、我らは体をかたくする。

そして通信電波が発せられた方向に機体を向き直らせた我らは驚くべき物を目にした。

何も無かった場所にムーバーが現れたのだ。

その機体—後々我らが幾度となく戦うことになるその黒い機体が。

◇◆◇◆

「そんな馬鹿な！アレはっ！アイツはっ！！」

飛高くんが動揺している。突如出現した黒い機体を目にした途端、取り乱し始めたのだ。

なにか知っているのだろうか。

「大丈夫か？飛高くん。」

「…ええ、大丈夫です。すいませんエドさん、ここ任せて良いです

か。」
「ああ、別に良いが…って、どこに行くんだ？」
飛高くんは何やらこの場を任せて走り去ってしまった。
何がなんだか。
冷静な飛高くんにしては珍しい取り乱し様だ。
まあ、いいか。

「誰か！艦長に報告を頼む！！」
「はい！！」
整備士の一人に声をかけ、私は自分の機体に向かった。
すぐにでも出撃して、鈴音くんたちを援護しなけりゃあならん。

「さあ、君は何者だい？」
私は一人、謎の襲撃者に問いかけた。
「エドウィン・ダークナイト！γブラストルー【ジョーカー】出撃する！！」

◇◆◇◆

迂闊だった。
高い可能性でこの襲撃はあり得たのに、その存在を考えつかないなんて。
「自分が思ってる以上に俺は舞い上がっているらしいな。」
まさか明科、いや鈴音との再会にここまで心を乱されるとはな。
たかがかつての幼馴染みとの再会だ、ってだけなのに。

何故だ。
何故お前は、記憶をなくした筈のお前がかつてのお前と同じように俺を「いーくん」だなんて呼ぶんだ…

「鈴…音…お前を。俺はお前を守りたかっただけなのに…どうして、お前は…」
「やあどうしたね、飛高くん。」
「…エドさん。アレはどうなりました？」
「あの黒いのなら私がでたら直ぐに撤退してしまったよ。」
「ハハッ、流石ですね。」
「まあ大した事ではないさ、ただ単に数の力を警戒して撤退してくれただけだろうさ。」

乾いた笑いをもらす飛高くん。なんだかその姿は私をひどく不安にさせる
。

「俺は昔、あの敵の仲間だったんですよ。」
「ほう。それはまた。」

…うん、まあ可能性の1つとして考えてはいたがやっぱり驚くなあ。

「話…聞いてくれますか？」
「ああ、良いよ。聞こう、だがその代わりと言ってはなんだが後で私の巫女談義に付き合ってもらうがね。」
「どうしよう、一瞬話聞いてもらうの止めようかと思っちまいましたよ。」
「てことは、話すんだね？」
「ええ。じゃあ、よろしくお願いしますね。」

◇◆◇◆

「そうですね。最初は僕と鈴音との邂逅の場面から、ですか。」

「鈴音と始めて出会ったのは五歳の時です。」

「両親どうしの仲がよかったからなし崩しというかまあある種必然的に僕と鈴音は出会ったんですよ。」

「初めに会った時の明科は、そうですねぇまあ可憐だとかそういう類いの言葉の似合う娘だった。」

「なんとなく予想はついてると思いますけど僕は鈴音に一目惚れしたんですよ。初恋でした。」

「まあ、その初恋は現在進行形で継続してるんですが。」「話が反れましたね。で、まあなんやかんやあって僕と鈴音はよく遊ぶようになったんです。」

「二人で鬼ごっこをして、かくれんぼをして、トランプをしました。」

「二人で色んな事をしましたよ。毎日が楽しかった。」

「そんなような関係がまあ十五歳くらいまで続きました。」

「そう、十五歳まででした。」

「十五歳の誕生日、鈴音が倒れたんです。」

「鈴音は生まれつきある能力が異常なほど高くて体がそれを完全に制御できれていなかった事が原因でした。」

「その能力っていうのがエーテリオン増幅の能力です。」

「鈴音のエーテリオン増幅能力は常人の十数倍だったんです。」

「まあ、エーテリオン増幅能力の強弱が能力の強弱なわけですから、当然色んな輩が鈴音を欲しがりました。」

「国、会社、学校…ほんとに色んな奴がアイツを欲しがった。」

「あの日からアイツの、鈴音の人生は変わってしまったんですよ。」

「そして、あの事件が起こった。起こるべくして、ね。」

「聞いたことくらいはあると思いますよ。思想家集団”正義の夜明け”に鈴音がさらわれたんですよ、僕の目の前でね。」

「事件はすぐに収束しました。”正義の夜明け”も解体されました。」

「でも鈴音はその時のショックで記憶をなくしました。」

「僕は自分を呪いましたよ。自分が非力なガキだったばかりに鈴音につらい思いをさせてしまったんですから。」

「そこで僕は力を求めて家を出ました。」

「軍は人類警察の台頭で形骸化してました。人類警察の入社可能年

齢は十九からですし、僕が力を手に入れられる場所は裏社会にしか無かったんですよ。」

「そんな僕が入ったのが傭兵組織”朱の剣”でした。」

◇◆◇◆

「”朱の剣”、か…道理で感じた事のある気配がするわけだ。」

「僕は最前線に出てましたからエドさんとやった事もあると思いますよ。」

驚くべき事を話したつもりなんだがエドさんの反応は淡白だった。けれど今はそれがありがたい、話したおかげで気持ちの整理ができた。

「てことはあの敵は”朱の剣”ってことかい？」

「ええ、アレは”朱の剣”が独自開発した電磁迷彩搭載機、　クアルソ・ディア・ズィークのエースカスタムです。」

「でも君はどうやって人類警察に入ったんだい？元テロリストみたいなものだろう？」

「ああそれは、僕はある戦いで戦没認定されてる筈だったんですよ。」

「戦没認定？」

「ええ、今の人類警察日本支部長の一人、鎌谷さんに救われて”朱の剣”から脱けたんです。その後司法取引を行った後で鎌谷さんに便宜を図ってもらって人類警察に入ったんです。」

「ああ…司法取引。なるほど、納得だ。」

司法取引。

国際共有刑法の施行により、すべての国家の刑法を同一のものにし

た際、すべての国家で解禁されたシステムだ。
簡単に言えば逮捕された犯罪者が他の犯罪者の情報で自身の刑罰を軽減するシステムだ。

「てことはあの敵は君を狙って？」
「ええおそらくは。生きていた事がばれて口封じの意味合いを持って襲撃してきたんだと思います。」
「…なるほど。この事を艦長は知っているのかい？」
「まだ知らないかと。まあ、襲撃があった以上遠からず連絡がいくとは思いますけど。」
「……なら問題は無いか。よし、　じゃあハンガーに戻るか。」
「はい。そうですね、鈴音とアインホルンの勝負の決着もつけなきゃならないですし。」
「ああそうだな。」
「・・・」
「・・・」
「・・・ありがとうございました、話聞いてくれて。」
「どういたしまして。まあ巫女談義に付き合ってもらうのだからおあいこさ。」
「しまった、忘れてた！」
「フフフ、覚悟しておくといい。」

そんな事を話しながら僕とエドさんは鈴音のところに戻ったのだった。

◇◆◇◆

「ちっ、ダークナイトの野郎が出てこなきゃ飛高の野郎を潰せたんだが。」

件の黒い機体のコックピットで金髪碧眼の青年が毒づいた。

『アハハハッざまぁｗｗｗ』

「黙れ、ソロ。ぶっ殺すぞ。」

ソロと呼ばれた声は通信先から青年を嘲笑している。

『だって、プッ、ダークナイトに圧されて逃げてきたんだろｗｗｗ』

「違うわ、戦略的撤退だ。」

『同じだしｗｗｗ言い訳乙ｗｗｗ』

「てめえ…」

青年の声がしだいに怒気を孕んだものに変わる。

『お前たちの仲が良いの分かった。早く帰ってこい、モルテ。』

「わかりました、師匠。」

一通りの報告を終えた青年は通信を切った。

青年の名はモルテ・フェスティヴィタ。

”朱の剣”のエースにして祝祭の死神の二つ名を戴く男であった。

◇◆◇◆

まあ、一つの物語の始まりの終り。

あの後で鈴音はアインホルンと再度勝負し、僅差で勝利を掴んだ。

で約束どうりアインホルンは一日ランドセルを背負って過ごした。

まあ、後は僕が急に鈴音を名前で呼ぶようにしたらアイツが前より五月蝿くなったくらいか。

ついでに前より可愛くなった。

……すいませんでした。

カッとなってやりました。後悔はしていません。

と、まあ色々あって。

そんなこんなでこの僕―飛高　軍と明科　鈴音の物語は始まりを告げた。

第四話　閑話休題（前書き）

どうもシャルロッ党員Ｎです。
いつも駄目ワナビの書いた拙い小説を読んでいただき有難う御座います。

三話までは前菜です。
四話は五話以降までの繋ぎ、口直しです。
そんなつもりで書きました第四話です。
ではでは

第四話　閑話休題

―一年前　伊豆七島―

黒煙があがり、天を灰色に染め上げている。
周囲には破壊されたムーバーと死体の山がそびえ立っている。
僕のムーバーはといえば敵の武士のようなムーバーの前に膝をつき、
コックピットに粒子振動太刀を突きつけられている。
端的に表現するなら絶体絶命、だ。
すると敵機から通信が入る。国際共有チャンネルだ。

『そこの機体に乗っている貴様。貴様、私と共に人類警察にくる気は無いか？』
「は、はぁ？」

急に何を言ってるんだ。この男。僕は敵だぞ？
その敵にむかって共に人類警察に来ないかだぁ？
馬鹿なのか、それとも罠か。

『聞こえんのか？私と共に人類警察に来ないか、と問うたのだが。』
「…僕にとってお前は敵だぞ？その僕がお前の言葉を信用出来ると思うか？」
『思うな。』

即答だよ。
駄目だ、真性の馬鹿だよ。コイツ。

『貴様、何の為に戦っている？』
「っ…！！なんだよっ…今度は揺さぶりをかけてんのか？」

『いや、ただ問うただけだ。何の為に戦っているのか、とな。』
「…」
『貴様と戦って感じた事だ、貴様は仲間を守ろうと戦っているようには見えん。』
「…」
『金の為、という戦い方でもない。』
「…」
『貴様は何かしらを守ろうとしているように見える。が、仲間ではない。ではなんだ？』
「っ…」

何なんだ！何なんだ！コイツはっ！！

『もう一度問う。貴様は何の為に戦っている？』「僕はっ…！！」
『もし、貴様を私が救ってやると言ったら貴様はどうする？』
「…自分にはそんな力があると思っているとしたらそれは、間違いだ。」
『いいや、間違いではない。』

『何故なら私は』

『救済者だからな。』

◇◆◇◆

ピピピピピ
アラームの音で僕は目を覚ます。

「夢、か…」

半覚醒状態の頭が認識した事実を呟いてみる。
あれは一年前の伊豆七島での人類警察軍事工場襲撃の時のビジョンだ。

僕と鎌谷さんの邂逅の場面。
僕があの人に救われた瞬間。
深い霧の中から救いだしてくれた人との出合い。

「懐かしいな…」

ビビー！
僕が郷愁に浸っているところに不粋なブザーの音が響く。
この時間帯にやってくるんだから鈴音だろうな。
そんな事を考えながら部屋のドアを開くと、そこには。

アインホルンがいた。

「た、助けてくださいデス…」

ボロボロだった。

・
・・
・・・

「落ち着いたか？」
「はいデス。すまないデス。」

何があったか大体の予想はつくが…まあ、一応聞いとくか。

「何があったんだい？」
「うう…リンネに襲われたデス…寝ていたら急にベッドにもぐり込んできて添い寝してきたから逃げてきたのデス…」
やっぱり…鈴音にちゃんと言っとかないとな…
まあ、鈴音もエドさんの「チキチキ☆ドキッエドさんだらけの鬼畜ムーバー訓練」（鈴音命名）で疲れてたんだろうが…
「大変だったな…アインホルン。鈴音にはちゃんと言っておこう。」
「ありがとうデス…グスッ」
泣き始めた。
鈴音怖がられすぎだろ。
「イクサは良い奴デス。リンネとは大違いデス。」
「ん～まあ鈴音も悪い奴なわけじゃないんだが、まあ扱いづらくはあるな。」
その点、アインホルンは基本素直だから苦労がない。
「決めたデス！これからイクサにはワタシのことをアウラと呼ぶことを許すデスヨ！！」
「鈴音もアウラと呼んでたが、許したのか？」
「リンネは止めろと言ったのに止めなかったから諦めたデス…」
「そうか…」
鈴音…お前アインホルン、いやアウラにすげえ嫌われてるぞ…
後で教えておくか…

◇◆◇◆

―太平洋　ビスマルクより約２０ｋｍのポイント―

「あぁ、哀れだな。貴様らは救う価値無き者だ。」

一人の男がムーバーのコックピットで呟く。
彼のムーバーは今現在、１３機の敵機体に囲まれている。
彼のムーバーは大型の刀がひとふりだけ。敵のムーバーはアサルトライフルとバズーカで彼の機体を狙っている。
だがそんな状況下であるというのに男は余裕のようだ。

『鎌谷！貴様に殺された仲間の痛みを知れ！！』
「覚悟無き者が何を言うかと思えば…」
『黙れ！罰をうけるがいい！！』

通信先の男が声を荒げて怒鳴る。
どうやら彼らは犯罪者で鎌谷に仲間を殺されたようだった。
それを逆怨みしつ彼を殺しにきたようだ。

『死ねぇ！！』

男の罵声と共に１３機のムーバーが一斉に襲いかかってくる。

チィン…

刹那、涼やか音があたり一帯を支配した。

気づけば犯罪者たちの１３機のムーバーは
両断
されていた。

「居合い、御劔崩し。その第一閃だ。」
鎌谷の冷徹な声がその涼音の支配を破りあたりに響く。
だがもはや犯罪者たちはムーバーと共に両断されていた。彼の声を聞いたのは彼自身だけだ。
「飛高ほどの力を持つ者は現れない…悲しいな。」
彼は心底悲しげに儚げにそう言ってムーバーのメインブースターを吹かして機体を再度ビスマルクに向けて走らせる。
「早くビスマルク行ってＰＳ－Ｎｅｏやるか…」

◇◆◇◆

―鎌谷の戦闘より数時間前―
「何！？アウラたんが我を嫌っている、だと！？」
予想どうりというか鈴音は全く気付いてなかった。
驚いて食っていたチキンライスを撒き散らしている。
ていうか何故気づかないんだ…
「ラッキースケベから始まるロリっ娘との恋愛は、前提条件ですでに破綻していたというのか！？」
「鈴音…」
なんて残念な…自分が惚れた鈴音はそこにはいません。眠ってなんていません。
アホか。

「イクサ。こんにちはデス。」
「やあ。噂をすれば影だな、アウラ。」
「アウラた～んっ ε＝ε＝（ノ≧∇≦）ノ」

バキャンッ
何やら恐ろしい音がした。どうやらアウラが鈴音の顔面にグーパンチをかましたらしい。
アウラは鈴音を排除して安心したのか僕の隣に腰をおろした。

「お～い、鈴音。生きてるか～？」
「……」

返事が無い。ただの屍のようだ。
大丈夫か？大丈夫じゃない。問題ある。
アホか。
つい一人ノリツッコミしてしまった。

「あれ、そういえばアウラは午前中はエドさんの訓練じゃなかったっけか？」
「ああ、それはエドが艦長に呼び出されたからお開きになったデス。」

艦長に、ってことは十中八九僕に関する案件だろうな。後で謝っとかないとな。

「ちゃんと聞いてるデスカ！イクサ！！」
「ん、ああ。すまん、聞いてなかった。」
「まったく…人の話はちゃんと聞かないといけないんデスヨ？」
「ああ、すまん。で、何の話だったんだ？」

僕が聞き直すとアウラはまったく…と言いながらコーヒーをすすり、再度話を始める。

「今日あたり来る日本人のメンバーの話デス。何か知らないデスカ？」

「いや…僕の派遣自体結構急だったから、聞いていないな。」

「そうデスカ…」

何やら残念そうだ。どうしたんだろうか。

「どうしたんだ、アウラ？」

「？　何のことデス？」

「いや、何となくアウラが残念そうな顔をしたからな。」

「リンネみたいな人がまた来たら困るデスカラ…」

「ああ…なるほどな。」

鈴音がアウラの中でトラウマになってるよ。

で、当の鈴音はまだ床に転がっている。

そろそろ起こすか。

「おい、鈴音。起きろ。」

「…アウラたんがぶった。父上にもぶたれたこと無いのに。」

鈴音はそれが言いたいだけらしかった。

「知るか。早よ起きろ。」

「うう、いーくんも冷たい…」

冷たいと言われてもな…まあ気にしなければいいか。

「いーくぅん…我に構ってくれ…」
「寂しがり屋過ぎるだろ…鈴音。」

◇◆◇◆

―ビスマルク　艦長室―
「エドウィン・ダークナイト、参りました。」
「ん、ご苦労。そこの椅子にかけたまえ。」

私はビスマルクの艦長室にいた。

「まあ君の事だ、何を話すのかは気付いているだろうが。」
「あの襲撃者の事と飛高の事でしょう？」
「その通り。まあ、私としては君に黒髪巫女ではなく黒髪浴衣こそ至高なのだと教えてやりたいのだが…」
「ハハ、まあそれは今度ゆっくりと。」
「ああ、そうだな。で、だ。」
「はい。」
「先日の襲撃機体だが本社のメインデータベースと照会した結果、”朱の剣”のクアルソ・ディア・ズィークだと判明した。」
「あ、それなら私は飛高から直接いくらか聞かせてもらいました。」
「おお、それは話が早くていい。ということは飛高の人類警察入社の経緯も聞いたか？」
「ええ。」
「それで飛高に関してはまあ日本の鎌谷が関係してるから本社もあまり心配してはいない、まあ鎌谷はよくやるからな。で、まあ軽く監視でいいとさ。」
「はい、了解です。」
「後は今日着任する日本人の新メンバーだが…」

◇◆◇◆

「というわけで我は今格納庫にいる。」
「なんでナレーションみたいな事してるんだ、しかもというわけでって言われても全くわからん。」
「フフ、我は常人の尺度では理解さえできぬ域にいるのだ…」
「要約すれば非常識で変人って事だな。」

まあ前からだから別に気にはならないが。
というわけで、新しいメンバーがもう少しで着くというので野次馬しようと格納庫に来た次第だ。
に、しても新メンバーか…日本人らしいが誰なんだろうか。

ビビィーー！着艦準備ィ！
ブザーがなり、整備員の声が響く。
ハッチの方に目を向けると遠くにムーバーらしき影が見える。

「ん？ちょっと待て…あのムーバー見覚えが…」
「どうしたんデス？イクサ？」
「いや、あのムーバー見たことあるぞ…あ。思い出した…」

平安貴族の烏帽子の様な頭部。
鋭い光を放つツインアイカメラ。
鎧武者をおもわせるショルダーアーマー。
そして、血のような鮮やかな赤の機体色。

「あれは、あの機体はまさか鎌谷さん！？」

そうだ。あの特徴的な機体を忘れる訳がない。
あのムーバーは僕の恩人、鎌谷　蒼天さんの”閃紅（せんこう）”だ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1641y/

変態警察２４時

2011年11月27日15時55分発行